【農を基軸とした多様で豊かな地域づくり】

農地の遊休化防止に対する支援（根羽村）

■背景とねらい

根羽村は面積の大半を森林が占め、数少ない農地も遊休化が進んでおり、大きな問題となっている。そこで、根羽村では青年農業者の受け入れや、気象条件に適する新たな品目の栽培により、遊休農地の解消を図っている。これに対し、支援センターは村の青年農業者が栽培しているトマトの巡回指導および新たな作物としてニンニクの導入の支援を行った。

■本年度の取組と成果

１　村内トマト農家の巡回・指導

今年度就農１年目と６年目の農業者２名の巡回を月１回程度行い、状況の聞き取りや病害虫の適期防除について指導を行った。２名とも病害虫の大きな被害は無かった。特に今年度就農者は計画の約 1.5 倍の収量を上げた。

２　ニンニク栽培の導入支援

８月 17 日にニンニク栽培講習会を開催した。農事組合法人の組合員を中心とした村民９名に加え、村内の農産物加工業者、根羽村観光協会事務局の参加があった。支援センターから品種や栽培管理等、一般的な説明を行った後、加工業者から収穫後の加工方法について、農事組合法人から栽培品種のとりまとめについて話があった。栽培に関する質問も多く寄せられ、根羽村内でのニンニク栽培に対する関心の高さがうかがえた。

■今後の課題と対応

今後も遊休農地の増加が見込まれている中、意欲的な青年農業者、研修生へ農地の集約が必要となる。併せて、村の気候に適した栽培のしやすい品目の導入も求められている。今後も栽培指導や新品目の導入支援を通じ、農地の遊休化防止のため活動を継続する。

（地域第三係：浅見茉由子）

源助大根の生産振興（泰阜村）

■背景とねらい

泰阜村では源助蕪菜と同様に、愛知県にあった井上源助採取場から託された「源助大根」の採種が続けられている。源助大根は肉質が柔らかいため、調理時間が短くて済むなどの理由から、福祉施設での需要も増えつつあり、潜在的な需要はあると思われる。

村は源助大根も特産品の一つにしたいと、５年前から取り組んできた。当センターでも関係機関と連携し、栽培や販路拡大支援に取り組んできた。

■本年度の取組と成果

村の特産品化に取り組み始めた５年前は、村内で採種している１戸が栽培するのみで、形質のばらつきも大きかった。そこで、井上源助採種場で育成された源助大根に練馬大根を掛け合わせた打木源助大根（加賀野菜）の形質を参考にするため視察に赴き、打木源助大根の種子を入手し、栽培するところから取り組んできた。徐々に源助大根の形質や栽培特性もわかってきたので、オリジナルの源助大根の普及に移すため、信州の伝統野菜への登録申請を支援した。

（審査員による審査の様子。採種に関する指導）

■今後の課題と対応

オリジナルの源助大根は、形質の安定化に向け、解決しなければならない課題も多い。信州の伝統野菜選定審査の時に、審査員から採種に関する指導を受けた。今後は指導された事項をもとに、良品質の大根が安定的に収穫できるよう支援していく必要がある。（阿南支所　原田　広己）

鳥獣害対策資材の実証展示

■背景とねらい

管内の鳥獣害は減少傾向にあるが、依然として6,500 千円程度の被害が発生している。広域柵の設置によりシカ・イノシシによる被害は減少傾向だが、シャインマスカットをはじめとするぶどうや、桃の栽培面積拡大に伴い、ハクビシンを中心とした中型獣による被害が増えつつある。

■本年度の取組と成果

今年度はサル・大型～中型獣対策として長野式電気柵の展示を飯田市・高森町・平谷村で、中型獣対策として、埼玉県農業技術研究センターが開発した「楽落くん」の実証展示を、飯田市・松川町・豊丘村で行った。また大鹿村では、電気柵を設置してあるにもかかわらずサルに侵入されるというブルーベリー園に設置したトレイルカメラの映像に基づいて､侵入経路の特定や対策を助言し、正しく設置すれば被害を防ぐことが可能だということを実証できた。

（侵入経路や対策の説明）

■今後の課題と対応

多獣種に対応した長野式電気柵の実証展示に加え、栽培面積が増加している桃・ぶどうの中型獣対策の実証展示、トウモロコシなどに対するカラス対策の実証展示を増やしていく。また、既存の電気柵のメンテナンスや、深刻化しているシカによる果樹の苗木の食害対策にも取り組んでいきたい。

本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。　　（阿南支所　原田　広己）

サルによる果樹被害の防止（高森町）

■背景とねらい

高森町では、町内全域に防護柵を整備してきたが、漏電している場所や電気柵の設置が困難な川沿いからサルが侵入し、樹園地を中心に各地で農業被害が出ている。そこで、サルによる農業被害を軽減するため、普及技術となっている「長野式電気柵」を応用したモデル展示ほを設置した。

■本年度の取組と成果

１　モデル展示ほの設置（９月 15 日～11 月 28 日）

侵入防止のネットを設置してきたが毎年りんごの食害等の被害に遭っている園地において、既存のネットに加えてネットの上部に２段の電気柵を追加する侵入防止柵を設置した。農家や役場担当者等８名が参加し、設置方法やサル被害の特徴について学びながら、協力して行った。

２　モデル展示ほの成果

電気柵の内側にサルが侵入することなく、無被害で収穫を終えることができた。

また、農業委員会で成果を報告したところ、低コストで簡単に設置できることに注目が集まった。

■今後の課題と対応

町内各地に数十頭からなる群れでサルが被害を出していることから、正しいサル対策の啓発と個々の農家による「長野式電気柵」設置の普及に取り組んでいく。本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

（地域第一係：西川　侑宏）

鳥獣害対策資材の設置講習会（豊丘村）

■背景とねらい

管内では野生鳥獣による農作物被害が増加傾向にあり、豊丘村でも特に果樹農家でハクビシンによる被害が多数確認されている。そこで、ハクビシンの侵入防止に効果的とされる電気柵「かたまったくん」の実証展示および設置講習会を８月 10 日（水）に開催した。

■本年度の取組と成果

豊丘村農業技術者連絡協議会（村、JA、南信州農業農村支援センター等）が主催となり、特に被害の多いぶどう、もも栽培農家を対象とした「ハクビシン対応電気柵設置講習会」を開催した。当日は村内の果樹栽培農家を中心に５名の参加があり、資材の開発に携わった野生生物研究所ネイチャーステーションの代表を講師として、ハクビシンの特性や侵入防止対策について講習を受けたほか、製品の製造・販売会社の監修のもと資材の設置体験を行った。

電気柵設置後にもハクビシンの侵入が確認されたため調査をしたところ、一部ネットと地面との設置部分に隙間が確認された。また、より簡易に設置できるよう支柱としてダンポールを使用していたが、強度不足が指摘された。柱を正規品にして張りなおしたところ、被害は確認されなかった。

設置講習会の様子

■今後の課題と対応

ハクビシンによる被害は管内に広く及ぶことから、今後は豊丘村以外の市町村でも設置講習会を実施し普及に取り組みたい。また、本取組は中山間地農業ルネッサンス推進事業を活用している。

（地域第一係　倉科　妙香）